

(西暦) 2019年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

赤ちゃんにやさしい病院 (Baby Friendly Hospital) における母乳栄養児の  
体重減少の実態と、その後の人工乳の補足に関する研究

学位の種類: 修士 (看護学)

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号 17894606

氏名: 田原茉理恵

(指導教員名: 安達久美子 教授)

注: 1 ページあたり 1,000 字程度 (英語の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 ページ (A4 版) 程度とする。

目的: 日本では、新生児の体重減少率をもとにルチーンで人工乳を補足している産科施設も多いが、WHO/UNICEF は、医学的に必要でない限り、新生児に人工乳等を与えないよう、勧告している。不必要な人工乳の使用を避けるためには、母乳育児を推奨している環境下での母乳栄養児の体重減少と人工乳の補足の要因の実態を明らかにする必要があると考えた。そのため、本研究では、人工乳を補足されていない児の出生後早期の体重減少の推移を明らかにし、新生児の体重減少率について ILCA, ABM 等の提唱する 7% に着目し、7% 以上となった児とその母親の要因、体重減少率が 7% 以上の群における人工乳の補足に関連する要因を明らかにすることを目的とした。

方法: BFH で出生し母子同室した単胎児を対象に、母乳栄養期間中の体重減少率とその後の補足の有無について後ろ向き調査を行った。日々の体重減少率の推移と最大体重減少率を明らかにした後、児の体重減少や人工乳の補足の要因と考えられる母子の背景因子を独立変数とし、人工乳の補足なしで体重減少率が 7% 以上となるか、体重減少率が 7% 以上となった児においてその後に人工乳の補足があったかをそれぞれ従属変数とした単変量解析を行った。人工乳の補足の有無については、単変量で有意であった項目を共変量として、多重ロジスティック回帰分析を実施した。

結果: 対象は 2245 名で、入院中一度も人工乳の補足をされなかった児の割合は 76.2% であった。母乳栄養児の最大体重減少率の平均 ( $\pm$ SD) は、 $7.7 \pm 2.0\%$  であった。母乳のみでの最低体重の体重減少率が 7% 以上であったのは 70.3% で、そのうち 72.2% は人工乳を使用せずに体重が増加に転じた。母乳のみで体重減少率が 7% 以上となることについて有意差があった項目には、「母親の出産経験とこれまでの栄養方法」、「分娩様式」、「母親の年齢」、「不妊治療」、「妊娠高血圧症候群・高血圧合併」、「精神疾患合併または既往」、「分娩遷延」、「分娩時出血量」、「産褥 1 日目の授乳回数」、「児の性別」、「出生時体重」、「在胎期間別出生時体格基準による分類」、「出生後の酸素使用」があった。人工乳の補足がない期間中の最低

体重の体重減少率が7%以上の集団において、その後に人工乳を補足される児の背景要因には、「初産婦」「混合・人工栄養の経験のある経産婦」「器械分娩」「ART妊娠」「妊娠高血圧症候群・高血圧合併」「要社会的支援者」「出生時体重2500g未満」「黄疸に対する光線療法」があった。

考察：BFHでは、母乳栄養児の7割は体重減少が7%以上となるが、そのうち7割以上は人工乳を使用せずに体重が増加に転じていた。本研究において明らかとなった、体重減少や体重減少後の補足に関連する要因を参考に、周産期医療従事者が母児の身体・精神・社会的な側面を総合的にアセスメントし、個別性に応じたケアを行うことが出来れば、ルチーン的人工乳の使用は避けることが出来ると考えられる。